

## 青年の認知する母親と父親の養育態度が 過剰適応に及ぼす影響

佐野 ひかり<sup>1)</sup>・塚 脇 涼 太

Effects of mothers and fathers' attitudes toward over-adaptation recognized by adolescents

Hikari SANO and Ryota TSUKAWAKI

【要 旨】本研究では、青年の認知する母親と父親の養育態度（暖かさ、過干渉）が過剰適応（対自因子、対他因子）に及ぼす影響について検討することを目的とした。大学生を対象に質問紙調査を実施し、208名（男性100名、女性108名）から有効回答を得た。親の養育態度が過剰適応に及ぼす影響を、共分散構造分析によって検討した。その結果、男性においては、母親が甘やかさず温かく見守ることで、対自因子、対他因子が低まる可能性が、女性においては、父親が甘やかさず温かく見守ることで、対他因子が低まる可能性が示唆された。

【キーワード】過剰適応、養育態度、母親、父親

### 問 題

社会的な場面において、周囲の人々の要求や期待に応えるために、自身の欲求を我慢するということがある。このような我慢は、過剰適応（over-adaption）と呼ばれ（小澤・下斗米，2015），その個人をストレス反応や抑うつといった不適応へと導く可能性があり，青年期において特に問題視されるという指摘がある（藤元・吉良，2014）。

#### 過剰適応について

過剰適応の定義について、宮本（1989）は，“適応の行き過ぎや必要以上の適応”を過剰適応であるとしている。また、石津（2006）は、過剰適応を“環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすることであり、内的な欲求を無理に抑圧してでも、外的な期待や要求に応える努力を行うこと”と定義している。

さらに過剰適応は、自己不全感や自己抑制といった性格特性からなる“内的側面”と、他者からの期待や要求に敏感に反応する過剰な他者志向性から構成される“外的側面”が存在することが明らかとなっている（石津・安保，2009）。これについては、石津・安保（2008）の因子分析において、“内的側面”として自己抑制、自己不全感の2因子，“外的側面”として他者配慮、期待に沿う努力、人からよく思われたい欲求の3因子が抽出されている。桑山（2003）においても、“対自因子”、“対他因子”の2因子が抽出されている。“内的側面”は“対自因子”、“外的側面”は“対他因子”に相当すると考えられる。

本研究で取り扱う過剰適応は、これら2側面の観点を取り入れ検討を進めることから、石津（2006）の定義を用いることとする。

<sup>1)</sup> 現所属：医療法人辰川会 山陽病院

### 過剰適応の生起・抑制要因の研究

過剰適応の生起・抑制要因には、イラショナルベリーフ（石津，2012），見捨てられ不安，承認欲求（益子，2008），拒否回避欲求（大西・岡村，2012）などのパーソナリティ特性を扱ったものがあり，それぞれが過剰適応の“対自因子”，“対他因子”を高めることが明らかになっている。また，家族機能（星野・岡本，2013），養育者の態度（石津・安保，2009），母子関係（齊藤，2010），親密な友人からの評価（中島・谷口，2016）などの対人関係を扱ったものがあり，これらの研究では，家族機能のバランスや，干渉，温かさといった親密な他者のかかわり方，親密な他者からの信頼，承認といった関係性が，過剰適応の生起・抑制にかかわることが明らかにされている。

例えば，石津・安保（2009）では，幼少時の気質と母親の養育態度が過剰適応傾向にどのような影響を及ぼすかを検討している。その結果，自己主張的な気質は，男女ともに過剰適応の“対自因子”を低め，男子においてのみ，自己制御的な気質は“対自因子”を低めることが示されている。さらに，男女ともに母親の温かさは，過剰適応の“対自因子”を低め，“対他因子”を高めること，過干渉は過剰適応に影響しないこと，“対自因子”が高まった場合は“対他因子”が高まることが示されている。

### 先行研究の課題

これらの先行研究には，2つの課題を挙げることができる。1つ目は，これまでの研究が父子関係に焦点を当ててこなかった点である。過剰適応の生起・抑制要因の研究においては，対人関係の中でも，母子関係に焦点を当てるものが多くみられる。しかし，親子関係に関する研究においては，母親と子どもの関係のみではなく，父親と子どもの関係が，子どもの発達・適応状態へ影響を与えることが指摘されている（数井・無藤・園田，1996）。また，母子関係，父子関係が子どもの適応に与える影響は，それぞれ異なることがさまざまな研究で示唆されている。このことから，過剰適応研究においても，父子関係を含めた検討を行うべきであると考えられる。

2つ目は，親の養育態度の時期を特定してこなかった点である。石津・安保（2009）の研究では，幼少期の母親の温かい接し方や自律性の尊重は，男子において過剰適応の“対自因子”を弱め，“対他因子”を強めることが示されている。女子においては“対自因

子”を弱め，他者を配慮するという“対他因子”の一面を強めるが，人からよく思われたいという一面を弱めることが示唆されている。また，勝田（2009）の研究では，青年が今までの親の養育態度について過保護と認知している場合に，過剰適応の“対自因子”が強まり，放任と認知している場合に，“対他因子”が強まることが明らかとなっている。過剰適応を従属変数としたこれらの研究において，過去のどの時点の親の養育態度を想起するかは，研究によってさまざまである。しかし，どの時点の親の養育態度が現在の過剰適応に影響しているのかについては検討されていない。

### 本研究の目的

以上を踏まえて本研究では，過剰適応の生起・抑制要因として，青年の認知する母親と父親の過去の養育態度に焦点を当て，検討を行う。過剰適応研究における養育態度の測定は，明確には示されていないが，幼児期から児童期を想定させている。また，不適応研究において，青年期前期にある子どもにとって親は重要な他者であるとの指摘があり（酒井他，2002），この時期の親の養育態度は，その後の適応に関連することが予想される。そのため，養育態度については，幼児期（幼稚園・保育園）・児童期（小学校）・青年期前期（中学校）の3時点を設定し，過剰適応への影響を検討する。

## 方 法

### 調査対象者

大学生234名に対して，質問紙調査を行った。記入漏れのある対象者を除いた結果，有効回答数は208名（男性100名，女性108名），平均年齢19.18歳，SD＝1.01であった。

### 質問紙の構成

質問紙は，両面印刷されたA4判用紙であり，表紙では，“大学生の対人関係に関する調査”と題し，研究の目的および回答上の留意点などを提示した。2ページ目からは，以下に示す項目に回答するよう指示した。

過剰適応に関する項目 青年の過剰適応を測定する主な尺度として，石津（2006）と桑山（2003）のものがあるが，石津（2006）の尺度は，中学生を対象としたものであったため，本研究では桑山（2003）の過剰適応尺度22項目を使用した。指示は“普段のあなたについてお尋ねします。以下のそれぞれの項目

について、最もあてはまる数字に○をつけてください。”と与え、“全くあてはまらない（1点）”，“あまりあてはまらない（2点）”，“どちらでもない（3点）”，“ややあてはまる（4点）”，“非常にあてはまる（5点）”の5段階で評定を求めた。

親の養育態度に関する項目 小川（1991）の Parental Bonding Instrument (PBI) 日本語版を元に、菅原・酒井・眞榮城・小泉（2000）が開発した、PBI 子ども評定版尺度の短縮版の11項目を、青年用に改訂した。教示は“あなたの母親（父親）のさまざまな態度や行動についてお尋ねします。あなたが幼稚園もしくは保育園（小学校、中学校）の頃のあなたの母親（父親）について、覚えている通りに、最もあてはまる数字に○をつけてください。”と与え、“全く違う

（1点）”，“どちらかといえば違う（2点）”，“どちらかといえばそうだ（3点）”，“非常にそうだ（4点）”の4段階で評定を求めた。

人口統計学的変数 最後に、性別、年齢、学年について回答を求めた。

## 結 果

### 各下位尺度の $\alpha$ 係数および全変数の相関マトリックス

過剰適応の各下位尺度の内的一貫性を、クロンバックの $\alpha$ 係数によって検討した結果、“対自因子”で $\alpha = .86$ ，“対他因子”で $\alpha = .68$ と，“対他因子”がやや低い値であるものの、概ね満足できる値が得られた。

親の養育態度の各下位尺度の内的一貫性を、母親・父親別、時期別にクロンバックの $\alpha$ 係数によって検討

Table 1  
各変数間の相関係数および有意水準

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	10.	11.	12.	13.
1.対自因子	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2.対他因子	.47**	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3.温かさ (幼児期母親)	.07	.25**	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4.過干渉 (幼児期母親)	.11	.03	-.48**	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5.温かさ (児童期母親)	.09	.25**	.84**	-.39**	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6.過干渉 (児童期母親)	.08	.00	-.46**	.79**	-.50**	—	—	—	—	—	—	—	—
7.温かさ (青年期前期母親)	.08	.23**	.72**	-.36**	.81**	-.44**	—	—	—	—	—	—	—
8.過干渉 (青年期前期母親)	.13	.02	-.42**	.68**	-.44**	.81**	-.52**	—	—	—	—	—	—
9.温かさ (幼児期父親)	-.04	.18*	.41**	-.22**	.49**	-.27**	.47**	-.31**	—	—	—	—	—
10.過干渉 (幼児期父親)	.08	-.15*	-.26**	.44**	-.24**	.45**	-.30**	.49**	-.58**	—	—	—	—
11.温かさ (児童期父親)	-.02	.21**	.44**	-.19**	.51**	-.26**	.49**	-.27**	.87**	-.54**	—	—	—
12.過干渉 (児童期父親)	.15*	-.02	-.25**	.48**	-.28**	.48**	-.29**	.52**	-.58**	.87**	-.57**	—	—
13.温かさ (青年期前期父親)	-.04	.22**	.35**	-.12	.45**	-.19**	.52**	-.26**	.76**	-.44**	.85**	-.45**	—
14.過干渉 (青年期前期父親)	.18**	-.03	-.20**	.39**	-.21**	.40**	-.27**	.54**	-.48**	.74**	-.51**	.83**	-.52**

注1) \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$  (両側)

した。その結果、幼児期の母親においては、“温かさ”で $a = .84$ ，“過干渉”で $a = .69$ と，“過干渉”がやや低い値であるものの、概ね満足できる値が得られた。児童期の母親においては，“温かさ”で $a = .89$ ，“過干渉”で $a = .76$ と、高い値が得られた。青年期前期の母親においては，“温かさ”で $a = .89$ ，“過干渉”で $a = .79$ と、高い値が得られた。また、幼児期の父親においては，“温かさ”で $a = .86$ ，“過干渉”で $a = .72$ と、高い値が得られた。児童期の父親においては，“温かさ”で $a = .89$ ，“過干渉”で $a = .80$ と、高い値が得られた。青年期前期の父親においては，“温かさ”で $a = .91$ ，“過干渉”で $a = .81$ と、高い値が得られた。

また、研究で用いる全変数の相関マトリックスを、全体（Table 1）および性別（Table 2）に示した。

Table 2から、男性では母親の全ての時期の“温かさ”が“対他因子”と正の相関を示したが、父親の養育態度とは無相関であった。女性では、母親と父親の全ての時期における“温かさ”が“対他因子”と正の相関を示した。また、男性では、母親と父親の全ての時期における“過干渉”が“対自因子”と正の相関を示したものの、女性では、“対自因子”と両親の養育態度は無相関であった。

#### 親の養育態度が過剰適応に及ぼす影響

親の養育態度（温かさ、過干渉）が過剰適応（対自因子、対他因子）に及ぼす影響を、共分散構造分析によって検討した。先の相関マトリックスから、性別によって親の養育態度が過剰適応に及ぼす影響は異なることが予想されるため、分析は男女別に行った。また、同一養育態度における3つの時期（幼児期、児

Table 2  
男性あるいは女性の各変数における相関係数および有意水準

女性\男性	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	10.	11.	12.	13.	14.
1.対自因子	—	.57**	.12	.24*	.08	.23*	.04	.31**	-.14	.22*	-.09	.25*	-.11	.31**
2.対他因子	.37**	—	.22*	.01	.26**	-.01	.21*	.06	.14	-.13	.13	-.02	.16	.04
3.温かさ (幼児期母親)	-.01	.27**	—	-.55**	.79**	-.46**	.64**	-.33**	.32**	-.27**	.39**	-.32**	.33**	-.21*
4.過干渉 (幼児期母親)	-.01	.05	-.42**	—	-.39**	.82**	-.37**	.60**	-.26**	.51**	-.30**	.50**	-.19	.34**
5.温かさ (児童期母親)	.07	.24*	.89**	-.38**	—	-.47**	.74**	-.30**	.47**	-.28**	.52**	-.35**	.50**	-.21*
6.過干渉 (児童期母親)	-.04	.01	-.46**	.77**	-.54**	—	-.44**	.72**	-.36**	.57**	-.40**	.58**	-.30**	.43**
7.温かさ (青年期前期母親)	.08	.25**	.81**	-.35**	.88**	-.45**	—	-.51**	.47**	-.37**	.46**	-.39**	.57**	-.35**
8.過干渉 (青年期前期母親)	-.05	-.02	-.51**	.75**	-.57**	.88**	-.54**	—	-.31**	.57**	-.29**	.56**	-.31**	.61**
9.温かさ (幼児期父親)	.04	.22*	.51**	-.18	.49**	-.19*	.47**	-.30**	—	-.67**	.89**	-.69**	.85**	-.60**
10.過干渉 (幼児期父親)	-.08	-.17	-.24*	.36**	-.20*	.34**	-.21*	.41**	-.47**	—	-.66**	.88**	-.57**	.77**
11.温かさ (児童期父親)	.02	.30**	.48**	-.08	.48**	-.14	.51**	-.25*	.85**	-.40**	—	-.70**	.84**	-.61**
12.過干渉 (児童期父親)	.05	-.02	-.16	.45**	-.18	.40**	-.17	.48**	-.43**	.84**	-.41**	—	-.57**	.80**
13.温かさ (青年期前期父親)	.01	.28**	.37**	-.04	.39**	-.09	.46**	-.20*	.66**	-.27**	.87**	-.31**	—	-.61**
14.過干渉 (青年期前期父親)	.05	-.11	-.19	.43**	-.21*	.38**	-.21*	.48**	-.36**	.71**	-.41**	.88**	-.42**	—

注1) \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ （両側）

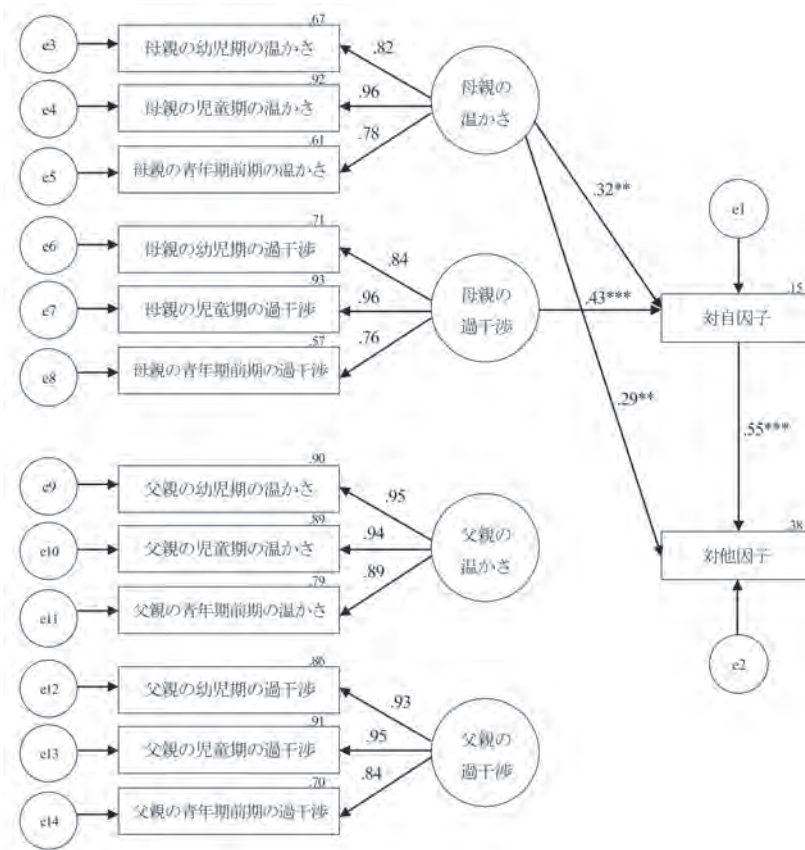


Figure 1. 男性における共分散構造の結果。

注1) 数値は標準化係数

注2) 有意でない変数およびパスは省略

注3) \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

注4) 共通因子間と誤差間の共分散は煩雑化を避けるため省略

童期、青年期前期)の相関が非常に高い(母親の温かさ $r = .72 \sim .84$ ; 母親の過干渉 $r = .68 \sim .81$ ; 父親の温かさ $r = .76 \sim .87$ ; 父親の過干渉 $r = .74 \sim .87$ )ことから、多重共線性の問題を避けるために、米村(2003)に従い、これらの変数の背後に共通因子を仮定し、過剰適応への影響を検討した。

男性における初期モデルでは、母親と父親ごとの3つの時期における温かさと過干渉がそれぞれ共通因子としての温かさと過干渉を構成し、それらが過剰適応の全ての因子に対して影響を及ぼすというモデルを設定した。分析の結果、男性における初期モデルの適合度は、 $GFI = .87$ ,  $AGFI = .77$ ,  $CFI = .95$ ,  $RMSEA = .10$ と不十分な値であった。そこで、有意でないパスを削除し、修正指数を参考に、4つの共通因子間に共分散

を仮定した。また、共通因子を構成する各時期の養育態度のうち、母親における幼児期と青年期前期の温かさと過干渉、父親における児童期と青年期前期の温かさと過干渉に共分散を仮定した。さらに、青年期前期における母親と父親の過干渉に共分散を仮定した。その結果、適合度は $GFI = .89$ ,  $AGFI = .82$ ,  $CFI = .97$ ,  $RMSEA = .07$ と許容できる値となった。修正後の最終モデルを、Figure 1に示した。最終モデルをみると、母親の温かさは過剰適応の対自因子と対他因子のそれぞれに有意な正の影響を及ぼしていた。また、母親の過干渉は過剰適応の対自因子に有意な正の影響を及ぼしていた。

次に、女性における初期モデルも男性の同様のものを仮定した。分析の結果、女性における初期モデルの

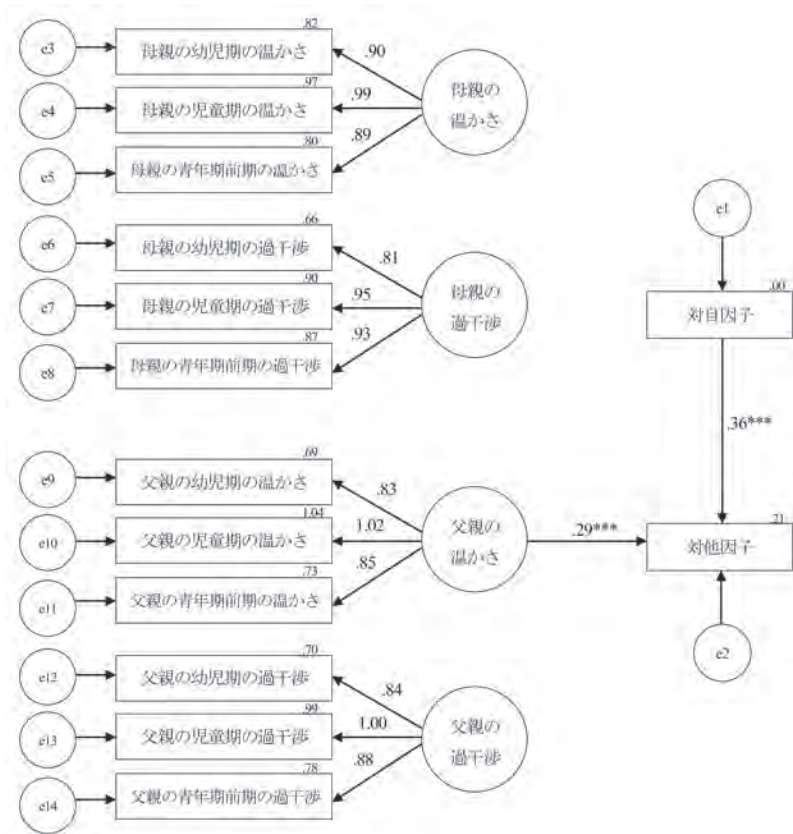


Figure 2. 女性における共分散構造の結果。

注1) 数値は標準化係数

注2) 有意でない変数およびパスは省略

注3) \*\*\* $p < .001$

注4) 共通因子間と誤差間の共分散は煩雑化を避けるため省略

適合度は、GFI=.77, AGFI=.65, CFI=.86, RMSEA=.16と不十分な値であった。そこで、有意でないパスを削除し、修正指数を参考に、4つの共通因子間に共分散を仮定した。また、共通因子を構成する各時期の養育態度のうち、母親における幼児期と青年期前期の温かさと過干渉、父親における幼児期と青年期前期の温かさと過干渉に共分散を仮定した。その結果、適合度はGFI=.89, AGFI=.83, CFI=.98, RMSEA=.07と許容できる値となった。修正後の最終モデルを、Figure 2に示した。最終モデルをみると、父親の温かさは過剰適応の対他因子に有意な正の影響を及ぼしていた。

## 考 察

本研究の目的は、過剰適応の生起・抑制要因として、青年の認知する母親と父親の過去の養育態度に焦点を当て、検討を行うこと、3時点の親の養育態度が過剰適応に及ぼす影響を検討することであった。しかし、時期間における相関が非常に高かったため、3時点の親の養育態度が過剰適応に及ぼす影響は分析が困難であった。そのため、以下では、母親と父親の養育態度が過剰適応に及ぼす影響について考察する。

### 母親と父親の養育態度が過剰適応に及ぼす影響

まず、母親と父親の養育態度が過剰適応に及ぼす影響を検証するため、共分散構造分析を行った。その結果、男性においては、母親の温かさが対自因子と対他因子を高めることが示された。母親の温かさが対他因

子を高めるという結果は、石津・安保（2009）と同様であった。

しかし、対自因子を高めるという結果は、石津・安保（2009）の結果と異なる点であった。本研究では3時点での親の養育態度を測定したが、これらの変数間の相関は非常に高く、大学生である現在においても同様の養育態度をとっていることが予想される。石津・安保（2009）の対象者は中学生であり、本研究の対象者は大学生であった。大学生は、親からの自立の達成に向かっていていると考えられる時期である（田中，2012）。温かい養育態度の項目をみると、“母親（父親）は、私に優しく、慈愛があった”，“母親（父親）は、私を褒めることはなかった（逆転項目）”など、甘やかしも捉えることのできる項目が存在する。戸田（2006）においては、過保護や甘やかしといった行き過ぎた母親の養育態度は、子どもの自己主張を育てる過程において、マイナスの影響を及ぼすことが示唆されている。さらに、対自因子が高まることは、自分に対する自信を失っている状態や、自分の考えを相手に伝えられないことを指している（石津・安保，2009）。これらのことから、本研究における温かい養育態度の測定項目は、自己主張などの大学生における自立の達成を妨げる甘やかしであった可能性があり、これにより対自因子が高まったことが考えられる。

また、石津・安保（2009）では、母親の過干渉による過剰適応への影響はみられなかったが、本研究においては、母親の過干渉が対自因子を高めるという結果が得られた。これについても、本研究の対象者が大学生であったことが影響していると考えられる。先に述べたように親からの自立が求められる時期において、親から過干渉されることは対自因子を高めると考えられる。さらに、母親が強迫的で過干渉である症例（岩谷，2003）において、子どもが外の世界に適応していく場面では、自信を持つことができなくなることが示されており、この結果を支持していると考えられる。

女性においては父親の温かさが対他因子を高めることが示された。母親の養育態度のみを取り上げていた石津・安保（2009）では母親の温かさが対自因子を低め、対他因子を高めるという結果であった。温かい養育態度が過剰適応の対他因子を高めるという結果については、石津・安保（2009）と同様であったが、影響を及ぼしていたのは父親の温かさであった。これ

については、女性は男性よりも父親の愛情を敏感に感じるという指摘（春日，2000）や、父親の関わりは女性にとって、母親以上に強い影響を及ぼすことが多数の研究で明らかとなっている（中丸・篠原・坂本・末島・上杉，2010）ことから、その愛情に応えようと、過剰に他者志向的になっている可能性が考えられる。

#### 本研究で得られた知見のまとめ

以上のことから、青年の過剰適応を予防する親の養育態度は、親と子どもの性別によって異なることが明らかになった。男性においては、母親が甘やかさず温かく見守ることで、対自因子、対他因子が低まる可能性が示唆された。また、女性においては、父親が甘やかさず温かく見守ることで、対他因子が低まる可能性が示唆された。これらの結果は青年の過剰適応の抑制に有効な知見であるといえる。

#### 今後の課題

今後の課題としては、以下が挙げられる。親の養育態度は、子どもを叱るべき場面なのか、褒めるべき場面なのかなど、場面によって臨機応変であることが考えられる。さらに、どの場面の親の養育態度を想起するかは、回答者各自によって異なり、想起した場面によって、親の養育態度の評定が変化することが考えられるため、今後は想起してもらった場面を統一させることが望ましいだろう。また、本研究では、子どもの認知する親の養育態度について扱ったが、実際の親の養育態度がどのようなものであったかについては不明であり、子どもの認知する親の養育態度と、実際の親の養育態度との間に相違がある可能性も十分に考えられる。そのため、過剰適応の生起・抑制にかかわる親の養育態度を探るにあたっては、実際の親の養育態度についても扱っていく必要があるだろう。

#### 引用文献

- 藤元 慎太郎・吉良 安之(2014). 青年期における過剰適応と自尊感情の研究 九州大学心理学研究, 15, 19-28.
- 星野 美咲・岡本 祐子(2013). 大学生における過剰適応と家族機能の関連—家族と自己の変容過程に注目した回想法を用いて— 広島大学心理学研究, 13, 107-127.
- 石津 憲一郎(2006). 過剰適応尺度作成の試み 日本カウンセリング学会第39回大会発表論文集, 137.

- 石津 憲一郎・安保 英勇(2008). 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, 56, 23-31.
- 石津 憲一郎・安保 英勇(2009). 中学生の過剰適応と学校適応の包括的なプロセスに関する研究—個人内要因としての気質と環境要因としての養育態度の影響の視点から— 教育心理学研究, 57, 442-453.
- 岩谷 康志(2003). いわゆる「社会的ひきこもり」に関するMMPIを用いた臨床的研究 慈恵医大誌, 118, 345-58.
- 春日 由美(2000). 日本における父娘関係研究の展望—娘にとっての父親— 九州大学心理学研究, 1, 157-171.
- 勝田 萌(2009). 青年の認知する親の期待・養育態度と過剰適応の関連 日本教育心理学会総会発表論文集, 51(0), 528.
- 数井 みゆき・無藤 隆・園田 菜摘(1996). 子どもの発達と母子関係・夫婦関係: 幼児を持つ家族について 発達心理学研究, 7, 31-40.
- 桑山 久仁子(2003). 外界への過剰適応に関する一考察—欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 481-493.
- 益子 洋人(2008). 青年期の対人関係における過剰適応傾向と, 性格特性, 見捨てられ不安, 承認欲求との関連 カウンセリング研究, 41, 151-160.
- 宮本 忠雄(1989). 過剰適応 青年心理, 76, 37-40.
- 中丸 澄子・篠原 稚恵・坂本 萌・末島 千穂・上杉 美和(2010). 娘の自己受容の源泉としての父親—3要因仮説の検討と父娘関係尺度構成の試み— 広島文教女子大学心理臨床研究, 1, 12-20.
- 中島 寛文・谷口 淳一(2016). 青年期における親密な友人からの評価の推測が過剰適応および身体・精神的健康に及ぼす影響 帝塚山大学心理学部紀要, 5, 59-56.
- 小川 雅美(1991). PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究 精神科治療学, 6, 1193-1201.
- 大西 裕子・岡村 寿代(2012). 自己志向的完全主義・拒否回避欲求と過剰適応との関連—青年期後期を対象として— 発達心理臨床研究, 18, 33-41.
- 小澤 拓大・下斗米 淳(2015). 過剰適応研究の体系化と今後の課題—過剰適応の防止に向けて— 専修人間科学論集, 5, 15-22.
- 齊藤 香恵子(2010). 大学生の捉える母子関係と自尊感情, 過剰適応との関連 生涯発達心理学研究: 生涯発達研究教育センター紀要, 2, 33-40.
- 酒井 厚・菅原 ますみ・眞榮城 和美・菅原 健介・北村 俊則(2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, 50, 12-22.
- 菅原 ますみ・酒井 厚・眞榮城 和美・小泉 智恵(2000). 青年前期における不適応行動の出現と家族ダイナミクスとの関連—生後15年間の縦断研究から 安田生命社会事業団研究助成論文集, 36, 96-102.
- 田中 輝美(2012). 大学生の認知する親の自立促進的態度と心理的自立の関連について カウンセリング研究, 45, 218-228.
- 戸田 須恵子(2006). 母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について 釧路論集: 北海道教育大学釧路校研究紀要, 38, 59-69.
- 米村 大介(2003). 多重共線性への対処 豊田 秀樹(編)共分散構造分析 疑問編 構造方程式モデリング(pp. 70-71)朝倉書店